
仮面ライダーW Re:start

通りすがりの泥棒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーW Re..start

【Nコード】

N8585P

【作者名】

通りすがりの泥棒

【あらすじ】

フィリップ復活後もミュージアムが流通させたガイアメモリを使った犯罪は後を絶たなかった。そんなある日、仮面ライダーとして街の涙を拭い続けた翔太郎とフィリップのもとに一件の依頼が舞い込んでくる。

この事件を皮切りに翔太郎とフィリップ、照井の三人は再び大きな事件に巻き込まれていってしまう。

『さあ、お前の罪を数えろ！』

美しさ誇るF／狙われた女子高生

風の街————風都。ふうとこの街には他の街にはない良い風が吹く。街のシンボル風都タワーには連日、観光客が溢れかえり街の人達は活気に満ちている普通の街だ。

けれど一見平和に思えるこの街にも涙を流す人が大勢いる。

そのざきりゅうべえ園崎琉兵衛が率いたミュージアムの作りだした様々な地球の記憶が詰まった『ガイアメモリ』を街に流通させていたからだ。

ガイアメモリを使用した人間はドーパントと言った怪物に変身することで人間には不可能な力を引き出すことが可能となる。

ガイアメモリによる被害者達が最後の希望として訪れる場所、それが鳴海探偵事務所である。なるみたんていじむしょ

その事務所を営む三人はかつてのオーナー『鳴海莊吉』なるみそうきちの娘であり事務所の所長である鳴海亜樹子と脳内に『地球の本棚』ほしと言う名の地球の記憶が詰まった脳内図書館を持つマイペースかつクールな少年、フィリップ。本名は園崎来人。そのざきらいとフィリップと言う名は莊吉がフィリップ・マローウに因み付けたもの。

そして師である鳴海莊吉をリスペクトし自らもソフト帽を愛用して常にハードボイルドを心がけているが中身は人情家でありお人好しなのでハードボイルドになりきれないハーフボイルド：左翔太郎。ひだりしやうたろう

風都市民にとって鳴海探偵事務所はドーパント関係の駆け込み寺や警察ではまともに取り合ってくれない事件を捜査してもらうための重要な存在である。

そして今日も一人の依頼人が事務所を訪ねて来た。

「お願いします！ 娘を探してください！ 遊びに行ったり三日も帰ってきてないんです…！」

いきなり事務所に飛び込むなり娘の搜索依頼を頼みこんできたこの人、山本早苗^{やまもとさなえ}。依頼人だ。

「まア、落ちついて、これコーヒーですどうぞ」アキコは依頼人を椅子に座らせコーヒーを出すと向かえ合うように座り依頼内容を詳しく聴き始めた。

「で、娘さん名前は？」亜樹子が問うと彼女は徐にカバンの中から一枚の写真を取り出しアキコに渡した。

「娘は…綾乃^{あやの}は三日前に久し振りに中学の時の友達と遊びに行くと言ったきり夜になっても帰ってこなくて心配になって、警察にも連絡して捜査してもらっているんですが一向に見つからず……、それで知り合いから腕の良い探偵が居ると聞いて此処に………」
彼女はコーヒーを手に取り口に運び短い溜息を吐いた。

「三日も帰って来ないなんて変だよ、どう思う？ 翔太郎君」

亜樹子が振り返ると奥に座っていたタイプライターを打つ翔太郎の手が止まりアキコ達の方へ歩き出した。亜樹子を手で払い一つ奥の席に座らせ空いた席に腰かけた。

「詳しい事は捜査してみねえと分からねえが、この事件ハードボイルド探偵、左翔太郎に任しときな…レディ」

すると亜樹子に横から『半熟やん！』と書かれたスリッパで頭を叩かれた翔太郎の頭からはどうも気の抜けたスパコンッ！という音が発せられた。

「いってゝな！ 何すんだ！？ アキコ…！」

「なにカッコつけてんの！？ 早く捜査してこいやー！」

亜樹子のスリッパ攻撃は未だやむことなく叩き続けている。

「だー！、言われなくても行くっての！」

翔太郎は椅子から立ち壁に掛かってるハットと写真を手に取り取

り事務所を飛び出していった。

「さてとっ、早苗さん」

「は、はい……？」

「風都煎餅食べます？」

———side翔太郎

事務所を出た翔太郎は風都の人間関係や裏事情に精通した情報屋、ウォッチャマンの元へ向かった。

三十分ほど街を徘徊しただろうか一軒のラーメン屋の屋台と屋台の前で話すどこか見覚えのある赤いジャケットを着た男とモツサリヘア^{ツラ}にヒゲ面の男を見つけた。翔太郎は急ぎ足で二人の元へ駆け寄るとジャケットの男の肩を叩いた。

「オイ、照井。お前もなんか追ってんのか？」

「左か。……お前、ここ最近巷を騒がしている連続失踪事件を知ってるか？」

この男、照井竜^{てるいりゅう}は風都署に勤務する超常犯罪捜査課^{ちようじょうはんざいそうさか}の刑事であり風都の三人目の仮面ライダー、アクセルの変身者である。以前ウエザーメモリの所持者、井坂深紅朗^{いさかしんこうろう}に家族を殺害されたがフィリップの母である園崎文音^{シユラウド}の協力を経てアクセルのメモリ、ドライバー、エンジンブレードなどといった復讐のための道具を受け取り井坂に對し復讐の炎を燃やし続けたが翔太郎達と徐々に打ち解けていくに連れ復讐心が薄れていった。

妹、春子の面影が重なる過去のガイアメモリの被害者、島本風^{しまもとなぎ}を救うため己の限界を超え新しいアクセルの力で島本風を救出と同時に井坂を倒した。因みに彼の淹れたコーヒーはかなりの美味。

「失踪というか、まあ娘を探してほしいって言う依頼なら今調査

中だぜ？」

「そうか。その三日帰って来ない娘と言うのは、もしかや高校生か？」

「そうだけどよ、何でそんなこと聞くんだよ？」

驚く翔太郎を見ると照井はポケットから四枚の写真を取り出し翔太郎に手渡した。四枚の写真の内一枚に映る人物は事務所に依頼に来た山本早苗の娘、山本綾乃だった。

「あん？　…コレってもしかして今回の被害者か！？」

「そうだ、さらに全員同じ雑誌のモデルをやっている上に失踪したと思われる現場にはそれぞれ五から二までのカウントダウンになっている数字が印刷されている紙が落ちていた。…左、お前はこれをどう思う？」

照井からの問いに顎に手を当て考え込む翔太郎。

「…：カウントダウンしている数字の残りは一つてことはつまり、後一人犠牲者が出るってことか…：！」

照井は無言でうなずくと横でラーメンを啜っているウォッチャマンの肩を掴み、引き寄せた。

「その事でコイツに話を聞いていたところだ」

「そうそう！　そうなんだよねえ～！！　それでね事件の事なんだけど、刑事しゃんが持つてる写真に写ってるのはみ～んな女子高生御用達のファッション誌でね～マニアの間では、ファイブフラワ～って呼ばれてるんだよねえ！」

目をキラキラさせながら解説していくウォッチャマン。自分の得意な事について頼られるのが嬉しいのだろうか。

翔太郎は眉間にしわを寄せしばらく黙りこんだがウォッチャマンへの質問は続く

「なあ、そのファイブフラワ～ってのはあと誰がいるんだ？」

ラーメンを完食し満足気なウォッチャマンは一つげっぷすると、

「あ、それはね～、まだ襲われてないのは…野々村美紀のむらみきちゅわんだけかな～？　…：ただね～この子、風の噂では相当性格悪いらし

いんだよねー！ それでも僕は好きだけどねえ、へへへ」

「野々村美紀か…。ウォッチャマン、この子が所属してる事務所とか知ってっか？」

—————sideフィリップ

リボルギャリー格納庫から出てコーヒーを飲みながら亜樹子の持ってきた料理本を片手に一息ついている翔太郎の相棒、フィリップ。翔太郎を行動派や体力系だとすれば彼は頭脳派か知力系だろう。

今彼は事務所に一人だ。依頼人は帰宅し、亜樹子は買い物に出かけている。かれこれ一時間ほどフィリップ一人でいる。しかし彼一人でいると静かなものだ。

「ホットケーキ：実に興味深い。検索してみる価値はありそうだ」料理本を読みながらフィリップは呟いた。

そのしばらくした後、亜樹子が買い物から帰って来た。両手にはパンパンに膨らんだビニール袋がぶら下がっている。フィリップはそれに目を移すとビニールをまじまじと見つめながら亜樹子に聞いてみた。

「亜樹ちゃん、その中に入っているのは一体何だい？」

「あーコレ？ これはホットケーキミックスって言ってね、牛乳と卵入れて焼くだけでおいしーいホットケーキが出来る魔法の粉だよ！ いっぱいトッピングする奴も買ってきたから後でみんな食べようと思ってね」

テーブルの上にドサリと袋を乗っけ、ふうとひと段落する亜樹子。

「亜樹ちゃん！ 君は素晴らしいよ！ 丁度今、ホットケーキについて検索をしていたところなんだ！！ 一度食べてみたいと思っていた所に何て偶然……！！」

「素晴らしいだなんて、そんな…その通りだけど！ それじゃみんなが帰ってくるまでにレパートリー増やしとこっか!？」

「ああ、そうしよう！」

美しさ誇るF／狙われた女子高生（後書き）

こんにちは〜。

いや〜まだタイトルが決定してないのでこれから変わります、ハイ。

そんなことより読んでいただきありがとうございました。

オーズが始まってるのに何やってんだ俺は、まだ一本中途半端なのに何やってんだ俺は…。

ついでに言うとコレも結構不定期です。1月〜4月位は忙しいので、ハイ。

これからもよろしくお願いします

美しさ誇るF／仮面ライダー再び（前書き）

こんにちは。

最近アーツのサイクロンジョーカーが手に入ってテンションがハイになってます。

最近と言っても、今これ書いてるときにですがね
かっこいいですねCJ

あと最初に謝っておきますが最後の方はかなり雑なつくりなってます、スイマセン

美しさ誇るF／仮面ライダー再び

フィリップと亜樹子がホットケーキ作りに精を出しているとき、翔太郎はウォッチャマンから聞いた情報を頼りに野々村美紀ら五人の所属している事務所へと向かっていた。

照井はと言うと、新しく入った情報が無いか一度署に帰って行った。

「アマリリス……。ここか、ウォッチャマンの言ってた事務所ってのは……。にしてもスゲー名前だな」

ブツブツ独り言を呟きながら事務所に入っていくと横から出て来た一人の少女とぶつかってしまった。

「おっと、ワリイな——」

「痛^ていな……チツ」

少女は翔太郎と接触した部分を手で払い、謝りもせずには出口へと向かっていった。

「なんだ！ アイツ！？ たたくよお、親の顔が見てみたいぜ」少女の後を追うようにして前から女性が走ってきたので引きとめると翔太郎は一つ尋ねてみた。

「あゝすいません、この事務所に野々村美——」

「すいません！ 急いでるんです！！」

翔太郎を振り払い少女と同じく出口へと走り去った。

「……だー！ なんだってんだ、どいつもこいつもよオ」

一言文句をつくと翔太郎は向き直り受付の方へ歩き出しカウンタ―に片肘をつきながら受付嬢に話しかけた。

「お嬢さん、この事務所に野々村美紀って子は？」

「美紀ちゃんなら今しがた走って出ていった子ですけど……、失礼ですがどちら様でしょうか？」

翔太郎は少し俯^{うつむ}いて先ほど自分の肩にぶつかってきた少女の顔を考えていると顔をしかめ頭をポリポリと掻きながら顔を上げて受付嬢

の問いに答えた。

「おっと失礼、俺は探偵の左翔太郎。何か困った事があったら鳴海探偵事務所に来な^{うち}」

翔太郎は懷から名刺を一枚取り出し彼女に手渡すと彼女はそれを軽く目を通した後、名刺入れの中に入れた。先ほどの二人と違い実に丁寧な娘だ。

「探偵さん……ですか。今日はどう行った御用件で？」

「あゝ、最近この事務所に所属してるって言うファイブフラワーの内の四人が行方不明になる事件があつて、唯一無事な野々村美紀も狙われるかもしれないってんで会いに来てみた訳だけど……あ！ マネージャーか社長は？」

「美紀ちゃんのマネージャーならさっき美紀ちゃんを追いかけて行つた人ですので今はいません。社長の方は……」

彼女はカタカタとキーの音を立てながらパソコンを使い社長の予定を調べ始めた。ほんの数秒後、調べ終わったのか翔太郎の顔を見るとこう言った。

「左様、アポの方は取られていらつしやいますか？」

「…アポ？ あーいや、取つてねえな」

「そうですか、申し訳ありませんがアポの方を取つていただかないと御会いすることは、ちょっと……」

考え込む翔太郎。しばらく沈黙が続いたが横から男の声がした。

「私に何か用かね？」

振り向くとスーツに身を包んだ背の高い中年男性が歩み寄つてきている。彼を見るなり受付嬢はペコリと頭を下げ一言挨拶をした。

「おはようございます、社長。探偵の方が社長に事件の事でお会いしたいと」

「探偵か……久し振りに聞いたな、懐かしい」

『探偵』と聞いたこの会社の社長は頬を緩めると翔太郎の隣に立ち顔をジロジロ見つめ始める。

翔太郎がいきなり自分の顔を見つめられどうしたものかとそのま

ま固まっていると社長の口が開いた。

「良い目をしている。私が昔お世話になった探偵そっくりだ、君は？」

翔太郎は再び懐から名刺を取り出し社長に手渡す。

社長は名刺を見ると驚いたような顔をして笑みを浮かべた。

「信じられない！ 何て偶然だ、鳴海探偵事務所か！ 左君、鳴海さんはお元気かい？」

翔太郎の顔が急に暗くなり小さく悔しさのこもった声で、

「……おやっさんは、事故で……」

社長の顔から笑みが消えた。が、すぐにさっきの表情に戻り喋り始める。

「そうか……、君はお弟子さん、でいいのかな？」

「あ、はい……」

「私に用があるんなら、話を聞こう。さあ、こっちへ」

社長は翔太郎を案内するように左腕を開き社長室へと連れて行った。

エレベーターの中、翔太郎は莊吉の顔を頭に浮かべ考えていた。

自分が莊吉の下についてからいくつもの事件を解決し依頼人を守ってきた。そんな莊吉に翔太郎は強い憧れを持ち彼の様になりたいとひたすらに思い続け莊吉亡き後、翔太郎は探偵として、仮面ライダーとして街を依頼人をそして彼の教えを守り続けた。少しでも彼のようなハードボイルドな男になりたい、少しでも彼に近づきたい。

昨日までは莊吉に近付けた、と思っていたけれど今日改めて自分と莊吉の距離を思い知った。

鳴海莊吉は自分が知る以前にも数え切れないほどの事件を一人で解決してきたのだ。

自分はまだ遠い。彼に比べればまだまだハーフボイルド半熟なのかもしれない、と……。

「着きましたよ」

社長の声が耳に入りハッと我に返るとエレベーターのドアが開き

目の前には『社長室』と書いてある札の掛った大きめの扉があった。社長は扉を開け翔太郎を中に入れ黒光りしていて高そうなソファに座らせテーブルを挟み自身も向かい側のソファに座った。そして胸ポケットから革製の名刺入れを出し内の一枚を翔太郎に渡した。

「紹介が遅れました。私、花田兵八はなだへいはちと申します。私が分かる範囲の事なら何でもお答えしますよ」

「どうも。さっき事務所の方に山本綾乃の母親から娘の搜索依頼が来て、捜査してる内にこの事務所の子供たちが綾乃ちゃん含むフアイブフラワーが四人失踪しているのが分かったんで残りの一人、野々村美紀を保護しに来た訳なんですが……」

「そう、ですか……。私としても早く彼女等を見つけて頂きたいので、少しお待ちください」

花田は立ち上がり壁際に立つ大きな棚を開くと左上をホッチキスで止められた数枚の紙をテーブルの上に置いた。

「これは？」

「これは彼女たちのスケジュールをまとめたものです。一人だけになっても美紀は活動していますのでこれを見れば美紀の行き先が分かります、使ってください」

翔太郎はスケジュール表を手に取り一通り目を通すと今日の日付と仕事場所が記載されている部分を見つけた。

「風都タワーか……。まだ間に合うな。すまねえ花田さん」

「良いんだよ、これくらいのこと。彼女らを守ってあげてください、探偵さん！」

「ああ！ まかせときな」

——風都タワー　ホール

日が傾き始め仕事もそろそろ終わるだろうという頃、翔太郎は風都のマスコットキャラクター風都くんと並んで撮影している野々村

美紀を缶コーヒー片手に見張っていた。

ふと腕についているデジタル時計、というか腕時計タイプのメモ
リガジェット『スパイダーショック』を見てみると時刻はもう四時
半を廻っている。

コーヒーを飲み干しゴミ箱に捨てると、撮影が終わったのか野々
村美紀とそのマネージャーが帰ろうとこちらに歩いてきた。

「よお、待ってたぜファイブフラワー最後の一人、野々村美紀」
話しかけて来た翔太郎を睨み悪態をつく。

「なにアンタ？ ストーカー？」

「いんや、ストーカーを捕まえる正義の探偵さ。よろしくな」

翔太郎が探偵と言った途端野々村美紀の横に立つマネージャーの
目が泳ぎ始めた。

翔太郎は彼女の眼が泳いでいるのに気が付き声をかけてみた。

「どうかしたのか？ マネージャーさん」

「いっ、いえ、少し疲れていて……」

「そうか、なら良いけどよ。……あ、そうだお前も狙われてるか
も知らないから保護しに来たぜ。ついでに社長から太鼓判も貰って
るからな」

野々村美紀は舌打ちをすると突然叫び出した。

「きゃー！ 誰かー！！」

これには翔太郎もマネージャーも驚き目を見開いてアタフタして
いる。

すると叫び声を聞きつけた警備員三名が翔太郎を拘束してしまっ
た。その間に野々村美紀は走ってエレベーターに乗って下に降りて
行ってしまいマネージャーもあとを追うように階段を走って下って
いった。

「オイ！ 待てって！ だアア！！ ったくよオ！」

このままでは探偵から犯罪者に成り下がってしまいそうな翔太郎
の元に救いの手が差し伸べられた。通路を走ってきたのは赤いジャ
ケットを着た照井竜。

「おいお前ら何をしている！ そいつは探偵だぞ、今すぐ離せ」
警察手帳を警備員に見せながら止めに入ると翔太郎から離れて行く警備員達。

「助かったぜ……！ サンキューな」

「どうしてこうなったんだ？」

「それはよ、………あ！？ やべえ行くぞ照井！」

「忙しいやつだ」

風都タワー前

「どこ行った……？」

辺りはもう暗くなり始め所々街灯がついている。翔太郎と照井の二人は走り去った野々村美紀とマネージャーの二人を追いかけたが見当たらない。もうどこかへ行ってしまったのかと諦めかけたその時、何処かから野々村美紀の叫び声が聞こえた。二人は叫び声の聞こえた方へ走って向かうとそこには怪人に襲われている野々村美紀の姿があった。

「た……助けて……」

「ダメェ！ 離しやがれ！！」

今にも消え入りそうなかすれた声で助けを求める野々村美紀と首を絞め続ける全身の所々に花と鋭い棘の生えたドーパント。ドーパントは力を緩めようとせず絞め続けていると野々村美紀は抗う力を失い力無く目を閉じた。

「なっ！？」

「しまった！」

野々村美紀はドーパントの手の中で緑色の光に包まれると小さな種になってしまった。それをドーパントは腰のまるでウツボカズラのような巾着に入れた。

「貴様……、野々村美紀に何をした！？」

「あゝら、ちょっと私の養分になってもらうだけよ。フフっ」

「他の四人もお前がやったのか！」

「そ、ぜくんぶ私よ。みんなこの巾着に入ってるわ。……男に興味は無いからあんた達は殺してあげる」

口調や声からして女のような声だ。そして今の発言によりファイブフラワー全員が巾着の中に入ってるのも分かった。あとは変身して倒すだけだが下手に攻撃すると腰の巾着に被弾して破壊してしまう恐れがある。

「いくぞ、左！」

「よし！ フィリップ変身だ！！」

照井は自分の腰にバイクのハンドルやメーターがついたアクセルドライバーを巻き付け懐からアクセルの加速の記憶の力が詰まった赤いアクセルメモリを取り出した。

【ACCCEL！】

「変……身！！」

ガイアウィスパーが鳴りドライバーに一つあるメモリスロットに差し込みアクセルを回すと

【ACCCEL！】

バイクのアクセルを回した時のような音と共にもう一度ガイアウィスパーが鳴ると照井の体が、真っ赤な体にフルフェイスヘルメットの様な頭部が特徴的な仮面ライダーアクセルにへと変身した。

「振り切るぜ！」

一方翔太郎は。

腰にメモリスロットが二つあいている赤を基調にしたドライバー、ダブルドライバーを装着すると事務所に居るフィリップの腰にも同様の物が出現。これを装着すると翔太郎とフィリップは意思を共有することが可能になる。

「行くぜ、フィリップ！」

【JOKER！】

翔太郎は胸ポケットから黒いメモリを取り出し左側のスロットに

装填。

「OK、翔太郎」

【CYCLONE!】

フィリップが緑色のサイクロンメモリを右スロットに装填すると翔太郎側にメモリとともにフィリップの意思が転送される

翔太郎はドライバーに現れたサイクロンメモリをもう一度強く装填しドライバーを開いた。

【CYCLONE! JOKER!】

すると瞬く間に風が彼を包みこみ体中央を通る銀色のセンターラインを境に右半身は鮮やかなサイクロンの緑、左半身は落ちついたジョーカーの黒。彼こそが街の涙を拭う二色のハンカチ、いや、仮面ライダー^{ダブル}W。

Wは左手を相手に向け一言。

「『さあ、お前の罪を数えろ!!』」

美しさ誇るF／仮面ライダー再び（後書き）

疲れました、最近。

あ、どうでもいいですねハイ。

此処直せよ！ とかやる気あんのか！？ とかちゃんと直しますので

感想まっています

美しさ誇るF／地味に華やかに（前書き）

2か月ぶりですかね？

こんにちは、通りすがりの泥棒です。

今回も地味に長めのくせして大して内容詰まってません、ごめんなさい

それよりニチアサは面白いですね

ゴーカイジャーはかなり期待しています。ギンガマンとガオレンジヤー出てこないかなって思ってます。

オーズはアレですよ、最近パンツにこだわってませんよね？
パンツ欲を忘れてしまうとは……。

美しさ誇るF／地味に華やかに

風都タワーの前で一進一退の攻防を続ける二人の仮面ライダーとドーパント。ドーパントの予想以上の力に徐々に押され始めている二人と違いドーパントは息切れすらしていない。二対一という不利な状況下でも余裕を持っている。

ドーパントが棘の生えた鞭状の物でWを攻撃するとWの体から火花が飛び散り地面に転がった。

「ぐわっ!!」

「左！ 大丈夫か!？」

「ああ、何とかな……」

差し伸ばされたアクセルの手を掴みゆっくり起き上るW。ドーパント自体の戦闘能力がやけに高いのが彼らを苦しめているのだ。

「あゝら、仮面ライダーってこんなものなのね……残念よ、私」

ドーパントは鞭を振るうとそれに生えていた棘が銃弾のように飛びだし二人を襲う。棘は見事に直撃し再び火花を散らす。

「がはッ!」

「くっ……! 小賢しい!!」

【ENGINE!】

アクセルはすぐに体制を立て直すと灰色の疑似メモリ、エンジンを取り出しエンジンブレードに装填し、引き金を引いた。

【RECTORIC!】

アクセルがエンジンブレードをドーパントに向けると剣先から青い電気が発生しドーパントの足元を駆ける。ドーパントはそれにより少し後退しW達との距離が開いた。

『翔太郎、サイクロントリガーで行こう!』

Wはジョーカーを引き抜き、銃撃手の記憶が内包された青いトリガーメモリを取り出してドライバーに差し込み展開。

【CYCLONE! TRIGGER!】

黒かったWの左半身が青く変わり、胸にはトリガーマグナムがセツトされている。そして右手でそれを構え引き金を引くとマグナムから風を纏った弾丸が連続で打ち出されドーパントの体に一発、二発と命中していきドーパントが膝をつく。

「どうだ!? ちったあ効いたろ!」

「フフツ。まアちよつとはね?」

『二人とも! 奴の傷を見るんだ!』

「傷が…塞がっていくだと!」

照井の言うとおり先ほどの攻撃で受けたドーパントの傷が癒え塞がってしまった。

「これじゃあ…いくら攻撃してもムダじゃねえか!」

「あーら、バレちゃったのね…。そろそろコイツ等も限界かしら?」

とドーパントは自らの腰についている巾着をポンと叩き、続けてこう言った。

「いいわ、どうせなら教えてあげる。私はね、この巾着の中に入った奴の生命エネルギーを吸い取って私自身の力に変えてるの…。生命エネルギーを吸い取られ続けると、もう二度と目を覚ます事は無くなるわ! アハハハハ!」

ドーパントの高らかな笑い声が辺りに響く。それを聞いたWは拳を強く握りしめた。翔太郎の頭の中は今、風都の人の命を弄ぶ奴に足しての怒りで満ちている。

「人の命を何だと思っている!!」

アクセルがドーパントに斬りかかるが紙一重でかわされ、ドーパントは後ろに飛びW達と距離を置くと腰から巾着を取り紐を解いて中から五つの種を取り出し地面に落した。

落とされた種は緑色の光に包まれるとそれぞれ女の子の姿に変わった。

「こいつ等は返してあげる…、目を覚ます事は無いけどね…!」
ドーパントはW達の足元へ棘を放ち怯んでいるすきに姿を消して

しまった。彼らの目の前に残ったのは五人の女の子たちだけ……。

——リボルギャリー格納庫

事務所にある翔太郎の帽子を掛けた扉を開けると広がる薄暗い大部屋。階段を下りると金網が広がっており、右手にはW専用の装甲車リボルギャリーが格納されている。さらに進むとホワイトボードとドライバーなどの工具類が広がり、フィリップの部屋としても使われている。

そんな格納庫に集まっているのは翔太郎をはじめとするフィリップ、照井の三人。

「検索の結果、メモリの名前は『フラワー』で間違いない。奴は巾着を通して自分のエネルギーに変換が可能……素早さ、攻撃力、自然治癒と厄介な相手だ。どうする？」

フィリップに問われても反応のない翔太郎。照井が肩を叩くとやっと気付いたのかいつもの雰囲気を取り戻す。

「どうかしたのか？ 左」

「……いや、思い出せねえんだよな。あーモヤモヤする！」

帽子を取り胸に当て二人の周りをウロウロと歩く翔太郎を照井とフィリップは黙って目で追いかける。翔太郎はたまにはくるっと回転してみたり、頭を掻いてみたり何か思いついたと思えばまた悩みます。そろそろイライラが積もり始める照井を横目にさらに悩む。

「おい左、さっきから何をしている!？」

「それがよ、思い出せないだよなー顔が……」

「「顔？」」

「……一体誰の顔だい？」

「野々村美紀っていうかファイブフラワーのマネージャー……」

翔太郎は普段使わない、いや使ってはいるが大して役に立たない自らの脳をフル回転させて思い出そうとしているが一向に思い出せない。モヤモヤとして顔が見えてこないのだ。

仮にも女性レディの顔を忘れるはずがないのだが如何せん印象が薄すぎるためか思い出すのが困難だ。

「……………あ！ 思い出し……………」

「みんな、見てよろしく！ これスゴイでしょ！？ 私特製のスー

パーホットケーキ！」

勢い良くドアを開け大声をあげて中に入ってきたのは亜樹子だ。

「……………はあ」

照井は溜息をついて翔太郎の方を見る。翔太郎は体をふるふる震わせながらゆっくりと振り返りそして……

「亜樹子オ！！」

怒鳴った。

「フィリップ……………」

「ああ、検索を始めよう」

翔太郎と亜樹子を横目に照井はフィリップに検索を頼み、フィリップはそれの真っ最中。

他二人と同じ部屋に居るとは思えないほどの温度差だ。よく今まで一緒に行動出来たものである。

————地球の本棚

フィリップは先ほどの翔太郎達といった薄暗い部屋とは全く違う、というよりこの世の全ての物と一致しない全面真っ白の世界にいた。それは雪が降ったからとかではなく最初から白いのだ。上下左右前後、ただただ白い。

この場所こそがフィリップの脳内に存在する地球ほしのありとあらゆる記憶を閲覧することが出来る、地球の本棚。

「……………キーワードは、ファイブフラワー……………マネージャー」

フィリップが単語キーワードを呟くとどこからか幾つもの本が並べられた本棚がフィリップの周りを縦横無尽に駆け回る。

そしてフィリップは自分の前に浮いている本を一冊手に取り読み

始め、しばらくにらめっこすると本を閉じた。

——リボルギャリ―格納庫

「……ファイブフラワーとそれに関する全ての事を閲覧した。マネージャーの名前は石垣^{いしがき}愛梨、デビュー前からファイブフラワーのマネージャーらしい」

フィリップは検索結果を伝えながらホワイトボードに書き込んでいく。

騒いでいた翔太郎と亜樹子はいつの間にかおとなしくなっていた。ある程度ホワイトボードに書き込むとフィリップは振り向いて調べた事柄をまとめてみる。

「彼女の特徴は、その見た目。至って地味って事さ、翔太郎が顔を中々思い出せないのが彼女の地味さを物語っているね。……人になかなか憶えてもらえないか……興味深い。おまけに嫉妬深いようだ」

アゴに手を当てながら翔太郎に近づいて行くフィリップはどこか楽しそうに見えた。

「で、幸い彼女は今日出勤しているけど君はどうする?」

フィリップに再び問われた翔太郎はにやりと笑い、こう答える。

「ハッ、ちょっと雑草を引き抜きに行ってくるわ」

美しさ誇るF／地味に華やかに（後書き）

口内炎が出来ました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8585p/>

仮面ライダーW Re:start

2011年10月6日19時50分発行